慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中世後期の説教におけるCuriositasの重要性
Sub Title	The importance of Curiositas in late medieval preaching
Author	赤江, 雄一(Akae, Yuichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	2006
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.74, No.4 (2006. 3) ,p.21(341)- 52(372)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20060300-0021

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中世後期の説教における *Curiositas* の重要性

赤江雄一

一　はじめに

中世後期のヨーロッパにおいて説教執筆の主要な形式が二つあった。それらを示すために「旧」(*antiquus*)と「新」(*modernus*)という言葉がしばしば使われた。「新」説教形式は、一二世紀末から一三世紀にかけて新しい説教形式として現れ、中世後期を通じて(あるいはそれ以降も)用いられた。この時期以前の説教は「旧」説教形式と呼ばれたが、一三世紀以降も死に絶えたわけではなく、わずかに使われつづけた。

ヘレン・スペンサーの定義によれば、旧説教形式とは「説教の実践者が聖書の一節全体について詳述することのできる注解的な説教の方法」である。[1] この説教形式のもっとも典型的なかたちは、聖書のある箇所を一節ごとに連続的に注釈するもの(a running commentary)である。[2] 他方、新説教形式は、「主題聖句(*thema*)と呼ばれる、聖書からとられた一行を入念に詳細に論じたもの」である。[3] 新説教は、いくつかの部分に枝分かれし、それぞれの部分はさらに小さい部分に枝分かれする。

説教形式を考えるにあたって、二つの史料ジャンルに注目することが適当である。まず、(書かれた)説教(集)がある。これらは往々にして、他の説教者たちが自らの説教を作る際の手本・範例として使えるように書かれている。説教(集)を執筆するとき、執筆者は単に説教(集)を執筆するのであり、どのように説教を執筆するかをいちいち「説明」しない。次に、説教執筆の執筆(および口頭での伝達)についてのマニュアルである「説教術書」(*artes praedicandi*)と呼ばれるジャンルが

存在する。説教術書は、説教（集）とは異なり、どのように説教を著述するべきかについて説明し、説教執筆の諸形式を記述しようとする。(4)

もし、説教（集）と説教術書という異なるジャンルに属する二つの著作が、高度に類似した説教形式とテクニックを扱っているとしよう。そうであれば、この二つの著作は、どのようにそうした説教形式やテクニックが機能していたのかについて異なる角度から光をあて新たな洞察をもたらすことができるだろう。というのは、一方で説教は、説教術書の説明的言語が適用される具体的な文脈を提供し、他方で、説教術書は、説教を読むだけでは必ずしも明らかにならない問題―たとえば、説教執筆者がある言い回しをつかう際にどのような考慮をしてそのような選択をしたのか、といった―に対して説明を与えられるからである。

本論文は以上述べたような説教術書の「潜在能力」を利用するが、その目的は、上述した「旧」説教と「新」説教という二つの説教形式の外的な差異について論じることではない。そうではなく、説教形式の外的な差異が当時の説教者たちにとって何を意味したのかを、もっともよく知られているある説教術書の著者の目を通じて考察することである。

説教形式がどのように認識されていたのかという認識の問題が重要なのは、活版印刷以前の時代において、説教がマス・コミュニケーションを可能にする大規模なシステムを形成していたからである。とりわけ、一三世紀の初めから、托鉢修道会はいわば「説教システム」と呼べるものを発達させた。托鉢修道会士は、範例説教（集）だけでなく、教訓例話（*exempla*）集、詞華集（*florilegia*）、聖書語釈集（*distinctiones*）といったその他に説教支援著作ジャンルの執筆に従事し、それらを主に自分たち自身の手で大量に筆写したのである。大量に流通した著作の多くはパリ大学を起点とし、そこから托鉢修道会の教育システムと修道院のネットワークを通じて西ヨーロッパ全体へと流布していった。托鉢修道会士は訓練を受けた説教者であり、彼らを通じて教会の教説は中世の民衆に達したのである。(5) 彼らは、新説教形式の発展においても主要な役割を果たしており、新説教形式は彼らの説教システムの中心的要素であった。托鉢修道会士の説教が中世のマス・メディアとして果たした役割を考えれば、こうした説教者らがなぜ旧説教形式ではなく新説教形式を好んだのか、あるいは、彼らが新説教形式を使

うにあたって認識していたその利点とはなにか、といったことについての彼ら自身の考えを知ることは、中世の人々のコミュニケーションと心性を探求しようとする際に重要であろう。

この試みの主な史料は、説教術書（*artes praedicandi*）のなかでもっともよく知られた著作であるベイスヴォーンのロバートの『説教形式』（*Forma praedicandi*）という著作（一三二二年）である。[6] ベイスヴォーン個人について知られていることはほとんどない。しかし、彼が説教の術について広範な知識を誇っていたことは確かである。たとえば、彼は、オックスフォードあるいはイングランド式、パリあるいはフランス式と名付ける、非常に微細に差異づけられた新説教形式の二つの型を論じる。彼の説教術の議論が洗練されていることから、彼が、上述の二つの大学のどちらかの卒業生である可能性は高い。しかし、これを実証する証拠は存在しない。

ベイスヴォーンの説教テクニックについての見方は孤立したものではなく、よく訓練された説教者たちのあいだで広く共有されていたものだった。彼の著作は、一四世紀の他の説教術書にも強い影響力を及ぼしている。[7] 彼自身は托鉢修道士ではなかったと思われるが、「世俗聖職者らから、また様々な異なった修道会に属する修道士たちから何度も執拗にせがまれて」この本を書いたと彼自身『説教形式』のなかで述べているように、説教術についての彼の識見は当時よく知られていたと考えられる。[8] ある学者たちは、説教術書のなかで描かれる説教テクニックは、実際に説教のなかで用いられたものとは必ずしも同じではないとみなしてきた。しかし、ベイスヴォーンが描いた説教執筆のテクニックを、一四世紀中葉のヨークで活動していた托鉢修道会士（アウグスティヌス隠修会士）ジョン・ウォールドビーの範例説教集『新主日説教集』（*Novum opus dominicale*）での実際の用法と詳細に比較した結果、ベイスヴォーンとウォールドビーの説教形式は、新説教形式のなかでもとりわけ特定かつ同一のものと見なせるほどに類似していることが明らかになった。[9]

ベイスヴォーンの『説教形式』を綿密に読むことで示されるのは、ベイスヴォーンのような、学問を積んではいるが民衆へ語りかける説教者たちにとって、説教形式とそれに付随する様々な説教テクニックを評価する際には、実用的有用性と同様に（そしてしばしばそれよりも）審美的観点が重要だったことである。とりわけ重要

だったのは *curiositas* という概念である。通常この語は「好奇心」と訳されるが、説教の文脈では、以下にみるように、「芸術的効果」、「装飾」、「洗練」、「目新しさ」といった意味において理解できる。[10] 説教術における美的感覚についてはこれまで何人かの学者たちが言及してきたが、よく訓練をうけた説教者の頭のなかで、どのような重要性をもっていたか、それが他の実用的基準とどのように比較考量されていたかについてはさらに検討する必要がある。[11] 本論文の目的は、以上述べた点に関する分析を行い、それによって、ある種の聴衆に語りかける説教者にとって美的でありかつ効果的である説教テクニックの同定のための基礎を提供すること、そして、それらのテクニックが説教者と聴衆の心のなかでどのように働いたのかについてさらに検討を進めるための出発点を提供することである。

以下、最初に『説教形式』全体の構造について短く概観する。それから、それぞれの説教形式についてのベイスヴォーンの認識と、なぜ彼が旧説教形式よりも新説教形式を好むのかについての理由が検討される。その後、新説教形式に属するテクニックに焦点を合わせ、それらの議論にあたってベイスヴォーンが言及するいくつかの基準を同定し、最後に、ベイスヴォーンの思考をより幅広い文脈のなかで考察する。

二　『説教形式』全体の構造

ベイスヴォーンの『説教形式』は五〇章からなり、それらは三つの部分に分けることができる。ただし、第一部と第二部のあいだ、そして第二部と第三部のあいだに、それぞれ一章か二章の橋渡しとなる章が存在する。最初の一五章からなる第一部は、説教と説教者の定義、様々な説教者のタイプ、説教者の資格、説教の目的など、説教と説教者一般についての導入的議論にあてられている。第二部は第八章から第一二章までの五章からなり旧説教形式を扱う。第三部は第一四章から第五〇章で新説教形式を扱い、この著作の主要な部分を担う。

第一部と第二部のあいだに、第六章と第七章があり、ベイスヴォーンがこの著作のなかで議論する説教の方法を列挙している。第六章の冒頭で彼は「序言的なことをみた後、説教に必要な形式を示すという［本著作の］目的をもう少し近しくみてみよう」と述べる。[12] 続けて以下のようにいう。

この目的についてよく認識しなければならないのは、当初から、様々な説教者たちは様々な方法を用いてきたし今もそうしており、したがって、ほとんど有能な説教者のいる数だけ多くの異なった説教の方法が存在していることである。したがって、そうしたあらゆる説教術を議論することは不可能であるし、またそれは［この著作の］目的でもない。近年（*secundum moderna tempora*）かなりよく知られているいくつかの説教方法の術について論じるのが目的である。[13]

このように述べた後、説教の歴史を短く叙述している。すなわち、最初に神がアダムに対して、それから天使を通じて、さらにモーゼと預言者を通じて、そして洗礼者ヨハネを通じて説教し、最後に神自身がキリストに受肉して説教をしたというものである。ベイスヴォーンは、キリストが洗礼者ヨハネが以前説教したときに用いたのと同じ主題聖句（*thema*）―「悔い改めよ、神の国が近づいている」―を使って説教したと指摘する。[14] そうすることでベイスヴォーンは、キリストですら自らの先触れ[15]である洗礼者ヨハネの説教を真似ていたと強調する。ベイスヴォーンはこの第六章を以下のように述べて締めくくる。

再度、キリストの後使徒たちと弟子たちがあらわれた。そのなかの第一が聖（使徒）パウロである。その後、様々な証聖者（殉教しないで信仰を守った人）や博士らがあらわれた。そのなかで聖アウグスティヌス、聖グレゴリウス（一世）、［クレルヴォーの］ベルナルドゥスが特に抜きんでていると私には思えるのだが、彼らのより厳かな説教は今日にいたるまで頻繁に用いられている。したがって、もしだれでも、キリスト、パウロ、アウグスティヌス、グレゴリウス、そしてベルナルドゥスというこれら五人の説教者たちのいずれかが駆使した説教の方法を真似ようとするのならば、それは賞賛に値するように私には思われる。[16]

これら五人の説教者が使ったとされる説教の方法は、ベイスヴォーンはここでその語を使ってはいないものの旧説教形式である。[17] そしてこの五人のそれぞれがもちいた説教の方法が、第二部（第八章から第一二章）の五章の

主題である。[18]

次の第七章の冒頭でベイスヴォーンは、旧説教形式の議論にはいるのではなく、新説教形式に言及している。

新説教の［方法］（*modernos*）のなかで、より一般的にもちいられるのがフランス式とイングランド式であり、それらは二つのかなり有名な大学［すなわちパリ大学とオックスフォード大学］から広まっている（*emanantes*）。それらは、前述の博士たちやそのほかの人々［すなわちキリスト、パウロ、アウグスティヌス、グレゴリウス、ベルナルドゥス］にその起源をもっているが、その特定のどれかに従っているわけではない。新説教の方法は部分的にはある一人の方法から加え、また部分的には別の人の方法から加え、部分的には自分自身の数多くの方法を加えたものである。[19]

これら二つの微細に区別された新説教形式の方法が、『説教形式』の主要部分である第三部の主題である。この部分はこの著作全体の四分の三以上を占めている（第一四章から第五〇章）。ベイスヴォーンはこれら様々な新説教形式のかたちを「装飾物」（*ornamenta*）—これは「説教テクニック」という意味で理解できる—という観点から論じる。[20] 第三部の最初の章である第一四章はそれらの「装飾物」を列挙している。[21] その前の章である第一三章が、第二部（第八章から第一二章）と第三部（第一四章から第五〇章まで）の橋渡しとして機能している。この第一三章は後で論じることになろう。

三　旧説教形式と新説教形式に対するベイスヴォーンの態度

上述したように、『説教形式』の全体構造を見た上で、その第二部に注目して、ベイスヴォーンの二つの主な説教形式に対する態度を論じることが可能になる。すでに見たように、ベイスヴォーンは「もしだれでも、キリスト、パウロ、アウグスティヌス、グレゴリウス、そしてベルナルドゥスというこれら五人の説教者たちのいずれかが駆使した説教の方法を真似ようとするのならば、それは賞賛に値することであろう」と述べている。[22] しかしながら、これらの説教者の権威を考えれば、ベイスヴォーンはこれ以外のことをいえる余地はほとんどなかっただろう。[23] 彼の真の態度を読み取るには、注意深い読みが

必要になる。

旧説教形式を扱う五つの章からなる『説教形式』の第二部において、ベイスヴォーンは、五人の偉大な説教者のそれぞれがもっとも巧みに用いた特定の説教の方法を列挙し、それらを用いることを勧めている。第八章の冒頭でキリストの説教テクニックに関して以下のように述べる。

> キリストが用いたテクニックのすべてを理解することは容易ではない。[しかし] 私は以下のように信じるのだが、キリストはキリスト独特のやりかたで賞賛に値するすべて説教の方法を用いていた。善の源泉として、キリストはあるときには、①約束という手段によって、また別の時には②脅かしによって、あるときは③例話（*exempla*）によって、別のときには④理（*rationes*）によって、あるときには⑤容易に理解できるように、そして別のときには⑥はっきりとわかるように［説教をおこない］、さらに別のときには、⑦深遠かつあいまいなかたちで［説教をおこなった[24]］。

次にベイスヴォーンは、それぞれの方法（と呼べるならば）について例を提示していく（例外は⑤であるが、⑤は⑥と重なっている）。たとえば、「理による用法」の例示として、「したがって、神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない」（マタイ一九章六節）というキリストの言葉を引用している[25]。第九章において、パウロの理の使用—それはすなわち権威ある典拠（聖書）から理をとること、あるいは説教者の論じる理を権威ある典拠で確認すること—が賞賛され推薦されている[26]。第一〇章ではアウグスティヌスも理に拠ったことで同様に賞賛されている[27]。第一一章では、グレゴリウス一世が、たとえば例話（教訓を例示するために用いられる話）の使用に関して賞賛を浴びている。

> グレゴリウスには賞賛に値する方法があった。それはすなわち、ほとんど場合、旧約聖書のフィグラ（*figurae*）[28]と具体的な例話（*exempla*）、そして懇願を用いることだった[29]。

しかし、旧説教形式は完璧というにはほど遠かった。ベイスヴォーンによれば、キリストの方法ですら欠点が

ある。

彼［すなわちキリスト］は、これらの方法を非常にすばらしく用いたがために人間の精神がそれらを十全に理解できたとは私には信じられない。というのは［キリストの方法には］必要な精妙さ（*subtilitas nulla necessaria*）あるいは感情に訴える方法（*modus movendi*）が欠けているように私には思えるからである。[30]

この言明は、思い出すことが容易であるという理由によって旧説教形式を勧めている。しかし同時に、もし説教者が旧説教形式のみを用いるのであれば、その説教者は、記憶力が弱く「精妙な議論」を使いこなせない劣った説教者と見られると暗示しているように読める。[33]

教育を受けた聴衆（*intelligentes*）にとって精妙さ（*subtilitas*）と感情に訴える方法（*modus movendi*）を欠いているという旧説教形式に対する批判は、ベルナルドゥスについて述べた第一二章にもあらわれるし、さらに第一三章でも説教において雄弁学（修辞学）を大幅に用いることを擁護しそれを促すかたちであらわれる。まず、第一二章でのベイスヴォーンの議論を見よう。

こうした言い方はベイスヴォーンがアウグスティヌスの説教について述べる時の言い方とも共鳴している。旧説教形式を特徴づけるアウグスティヌスの方法[31]を指してベイスヴォーンはこのように述べる。

最初の方法は、記憶力が弱く不安定な者たちにはよい。というのは、偉大な福音書の一節のほうが、精妙な議論（*subtilis argumenti*）や説教の分割部分をさらに分けた小区分よりも容易に思い出すことができるだろうから。[32]

ではベルナルドゥスについて述べよう。彼の方法は、ほとんどあらゆる天才的な人々の方法と能力を超えており、「方法がない」方法であることが理解されねばならない。彼は聖書［の言葉］を彼の言葉のなかであらゆる［天才的な］人々以上に聴衆に伝え、聖書やその他の権威ある典拠に拠らない文はほとんど一つとしてないほどである。彼は常に熱心に、常に芸術的に（*artificialiter*）説教する。彼は、ある

決まった主題聖句（*thema*）を、あるいは主題聖句のかわりに彼が論じようとするある題材をとって、芸術的に話しはじめ、それを二つあるいは三つ、あるいは四つ以上に分割し、雄弁学（修辞学）のあらゆる文彩を用いて、その題材を確認し結論づける。その結果、彼はその著作全体をこの世的であると同時に神的な二重の香りで磨きあげる。それは、教育を受けた人々（*intelligentes*）を信心にむかってより感情に訴えるように（*magis motive*）招く。彼はさらに新しく洗練されたテクニック（*curiositatibus novis*）をもたらすのだが、そうしたテクニックが以下論じられる。[34]

まずここでは、ベルナルドゥスが聖書といった権威ある典拠を頻繁に用いるのが賞賛されている。しかしそれ以上に賞賛されているのは、彼の修辞学的テクニックの多様さ（*omne color rhetoricum*）であり、教育を受けた聴衆の感情に訴える、新しく洗練されたテクニック（*curiositates novae*）である。[35]

次の第一三章は旧説教形式を論じていない—したがってこの章は第二部に属さない—が、同時に新説教形式そのものを論じているわけでもない—したがって第三部にも属していない。この章は、修辞学と雄弁を擁護することによって次の第三部において論じられる新説教形式を導入することを可能にしており、第二部と第三部の橋渡しとして機能している。

したがって、説教は誤った文彩（*falsis verborum purpuramentis colorum*）によって輝くべきではないとある者たちが述べているのは、私にはまったく言語同断であるように思われる。というのは、ベルナルドゥスの非常に数多い説教においては、その全体がほとんど常に文彩において（*coloratum*）豊かであるからである。[36]〈中略〉[37]智慧と雄弁は、そのどちらか一方だけであるときよりも、二つが一緒のときにわれわれを動かす（説得する）というのを誰が躊躇するだろうか。したがって、雄弁は［二つのなかで］優れているほうの智慧から離れるな、と強くいわねばならない。しかし、もし両方を満たすことができないのであれば、どちらも智慧を達成することはできない。単にすべてのよいことを欠くよりは雄弁があるほうがまだよいことは確かである。という

のは、雄弁も智慧も欠く意見にどんな価値があるというのだろうか。したがって、智慧を通じてあまり生産的（*fecundi*）でない者は、雄弁（*facundi*）であるよう努めさせるがよい。「雄弁は弱い議論（*causa*）に強さをもたらすことができるかもしれない」と詩人は述べるが[38]、「結果として、理（*ratio*）に訴えることがほとんど役に立たない人に対して、雄弁術は非常に効くようにおもわれる」と『アイルランドの驚異』の序文においてギラルドゥス・カンブレンシスは述べている[39]。ここから、聴衆が彼ら［説教者］を判断するからといって、人々の賞賛を求める欲望から彼ら［説教者］は聴衆に対して正当な議論（*causa*）を示すべきだということにはならない。しかしながら、上に述べたように、彼らが正しく意味のある議論（*causa*）のために雄弁を求めることはできる。もし智慧を勉学（あるいは努力）（*per studium*）を通じて智慧を持つことができるならば、雄弁を求める（*studeat*）べきだというのは、アウグスティヌスが『キリスト教の教え』第四巻のなかで教えているように確かに非難に値することである。そこにおいて、アウグスティヌスは説教者が

［聴衆を］教え、喜ばせ、動かすことを求めている[40]。あまりにも［聴衆を］喜ばせようとして教えることも［心を］動かすこともできない者たちについて、その雄弁は、雄弁であればあるほど非難に値するとアウグスティヌスは述べる。したがって、よいものが甘く混じり合うように、［雄弁と智慧が］いっしょになるとき、それらはよりよいものとなるのである[41]。

このややこしい議論のなかで、ベイスヴォーンは概してアウグスティヌスに従っている。確かにアウグスティヌスは『キリスト教の教え』のなかで、雄弁／修辞学に対する智慧の優位を主張するが、智慧と雄弁／修辞学が相互排他的であることは否定している。しかし、「もし両方を達することができないのであれば、どちらも智慧を達成することはできない。単にすべてのよいことを欠くよりは雄弁があるほうがまだよいことは確かである」というとき、ベイスヴォーンは、実際上は（単純に表現された）智慧よりも雄弁のほうが重要だと述べている。それ自体修辞学的な仕掛けである語呂合わせをもちいて、ベイスヴォーンは続けて述べる。「智慧を通じてあまり

生産的（*fecundi*）でない者は、雄弁（*facundi*）であるよう努めさせるがよい」と。[42]

以上詳しくみた第一三章が重要であるのは、これが旧説教形式と新説教形式に対するベイスヴォーンの態度を一層明らかにするからである。新説教形式（*modus modernus*）という言葉こそこの章のなかでただの一度もつかわれていないが、「雄弁」（*eloquentia/facundia*）が、この章に続く『説教形式』第三部の主題である新説教形式を指しているのは自明である。旧説教形式が *curiositas*, *subtilitas*, *modus movendi* といった要素を十分に含んでいないのに対し、新説教形式は、はるかに幅広い修辞学（雄弁術）的な技巧をつかえる機会を説教者に提供する。ベイスヴォーンにとって旧説教形式は決して不必要ではない。以下で見るように、旧説教形式は例話（*exempla*）のように新説教形式のなかに含まれるべきだと彼が勧める数多くのテクニックを含んでいる。しかしながら、旧説教形式の本質的限界は、ベイスヴォーンのような説教者たちによって重んじられた美的価値を十分にうみだすことができないということを意味したのである。

四　新説教形式で用いられた説教テクニックの諸基準

前章が示したのは、旧説教形式が *curiositas* やその他の美的特質を欠いており、それが、ベイスヴォーンが新説教形式を好む大きな理由になっていることだった。したがって、新説教形式で用いられるテクニックが詳細にわたって論じられる『説教形式』の第三部においても、*curiositas* が個々の説教テクニックの使用（および不使用）の主要な基準の一つとしてしばしば言及されていることに不思議はない。また、目新しさ、*subtilitas*（精妙さ）、*utilitas*（有効性）といった他の基準も *curiositas* とならんでしばしば言及されている。本章の目的は、それぞれの基準が―なかでも特に *curiositas* が―どれほど重要だったのかを探ることである。

まず、ベイスヴォーンは、ある説教テクニックを導入する理由のなかに目新しさと *subtilitas*（精妙さ）をよいものとしてあげる。たとえば、第二一章ではこのように述べている。

ここで、［主題聖句の］言明の一語だけ（*dictio*）に

基づいた説教はありうるかどうかを考察することは、この［著作の］目的にとって付随的なことにすぎない。ただ、はっきりとした一語の言明に基づいた説教はありうると私には思われる。しかし、その場合の一語の言明とは、**理解せよ**（***Intelligite***）、**宣べつたえよ**（***Praedica vel Praedicate***）、**行け**（***Ite***）、**歩け**（***Ambulate***）といった奨励・勧告で用いられる一語を論じることによって、それとは別の言葉を暗示しているものでなければならない。しかし、この方法はほとんどまったく知られていない（*quasi omnino ignotus*）。したがって、私は喜んで、できる限りでそのような説教の事例をこの時点で挿入したい。[43]

ベイスヴォーンは実際ここで、説教の序文の一部である「副主題」（*antethema/prothema*）の例をあげ、[44]その後「この副主題のなかには十分な精妙さ（*sufficiens subtilitas*）があることはすでに明らかである」と述べ、その理由を述べる。[45]

同様に、ベイスヴォーンは時に二つのテクニックを一緒に説明するが、その際に一つは基本的なものであり、もう一つはより *curiosus* なものである。たとえば、第三一章で彼は、第四の「装飾物」（*ornamentum*）である「導入部」（*introductio*）を説明し、第三二章で以下のように評する。

第二一章において約束した前述の予定にしたがって、[46]私は、そのような主題聖句をもった「導入部」をつくるためのもっと芸術的で／洗練された方法（*magis curiosum modum introductionis*）は、まず権威ある典拠によって導入されねばならないと考える。その結果、その権威ある典拠から、その［説教がなされる］祝日と主題聖句に対応する、［説教の］三つの分割部分を直ちに引き出すことができるように。[47]

このテクニックの具体的な例を示した後、ベイスヴォーンは、以下のように続ける。「したがって、**理解せよ**[48]という［主題聖句の］一語の言明のなかで単純に命じられていることをその説教者は三つのかたちで効果的に満たしたのである。したがってこの方法が非常に芸術的／洗練されていることがはっきりと示された。別の方法もここで使うことができるが、それはこれほど芸術的／洗練

されたものではない」と。[49]

目新しさと *subtilitas* の他に、*utilitas*（有効性）も *curiositas* と並列的にあるテクニックの利点としてあげられる。たとえば以下を見よう。

私は、教会会議での説教のなかで、ある有能な男が以下の主題聖句を全体として用いたのを聞いたことがある。その主題聖句とは「神のブドウ畑に収穫のために働き手を送ってくださるように、神に願いなさい。行け」（ルカ一〇章二―三節）（マタイ九章三八節も参照）。この者は名高い神学教師であり、また「スコラ学的議論の手法である」「問題」（*questiones*）と説教の専門家である偉大な高位聖職者であった。しかし、彼の用いた主題聖句は、特に「行け」という言葉を加えたために、あらゆる知性ある者たちによってひろく非難された。この「行け」という言葉だけについても、十分に芸術的な／洗練された、有用な説教をつくることができるだろう（*sermon satis curiosus et utilis*）。[50]

特に興味深い事例は、例話（*exempla*）とその下位カテゴリーであるフィグラ（*figura*）の使用である。[51] 先に見たように、グレゴリウス一世はこれらのテクニックを用いたことで賞賛されている。「グレゴリウスには賞賛に値する方法があった。それはすなわち、ほとんど場合、旧約聖書のフィグラと具体的な例話、そして懇願を用いることだった」。[52] グレゴリウスの権威に訴えることに加えて、ベイスヴォーンはこれらのテクニックの使用を促す二つの基準をもちだす。

一つは *utilitas* あるいは *efficacia* である。「これら［のテクニック］の第一のもの［すなわちフィグラ］は、ふつうの／教育を受けていない俗語を用いる人々（*rudes*）に対して非常に有用、効果的であり理解されやすい（*magis utilis et efficax, et intelligibilis*）」と述べている。[53] また、そのほかの箇所でも「第三の理に訴える方法は例話（*exempla*）を用いることだ。というのは、これは俗人に対して非常に効果的（*multum valet laicis*）だからだ。俗人は例話を聞くとたいへん喜ぶ」[54]と述べている。

例話とフィグラを用いる第二の基準は *curiositas* である。

パリの説教者たちは、この時点（すなわち「導入部」のなかで（*in modo inductivo introductionis*））、ただちに最大の芸術的／洗練されたフィグラを付けくわえるだろう。あるいは聖書の証言を引く時点で付け加えるであろうが、これを彼らはあまり大きな価値があるとは考えていない。[55]

ベイスヴォーンが、フィグラとは別の例話の下位カテゴリーであるヒストリア（*historia*）について述べるとき、*curiositas* の感覚に訴えることを勧める。その場合も *curiositas* は目新しさの感覚（*nova et inusitata*）を含んでいるように思われる。

私は、聖書から引かれたもの以外の話（*historia*）を使うことはよいと説明した。そうしたものは、たとえば、アウグスティヌスやグレゴリウス一世、あるいはその他の著者、あるいはヘリナンドゥス、ヴァレリウス、セネカ、マクロビウスからの物語である。この方法において、アウグスティヌスの話は、それが目新しく、聞き慣れない（*nova et inusitata*）ものであれば、聖書からの話よりもふさわしい。ヘリナンドゥスや、そのほか滅多に考慮にいれられることのない著者からとられた話は、アウグスティヌスやアンブロシウスの話よりもふさわしい。その理由は、人の虚しい／虚栄心にみちた好奇心（*vana curiositas hominum*）以外のなにものでもない。[56]

ここで、聖書以外からの話を説教のなかで用いることが虚しい／虚栄心にみちた好奇心に由来していることを認めつつ、ベウスヴォーンはそれを非難するどころか、それを恥じているようには思われない。

しかしながら、説教テクニックのなかには、芸術的／洗練されたものでありながらも、有用ではないものがあった。言いかえれば、*curiositas* と *utilitas* が矛盾し両立しない場合があったということである。そうしたテクニックのひとつは、循環的発展（*circulatio*）と呼ばれるものである。[57] ベイスヴォーンはこれについて以下のように述べる。

しかしながら、この装飾物［テクニック］を用いることが有用（*utile*）であるかどうかはある人々にと

って疑いのあるところである。私は、それが有用であるというよりも芸術的／装飾的（*magis curiosum*）であることを知っている。一般的に、私はこのテクニックが自然に出てくるときでさえ、それを使わない。というのは、それは、聴衆が非常に鋭敏な［あるいは、精妙なものを理解できる］人々（*valde subtiles*）でないかぎり、解くことのできない迷宮を作りだして聴衆の頭を鈍らせるからである。[58]

別の事例は、第五〇章の前半で論じられるテクニックである。

今や先に（第四九章の冒頭で）ふれた第二の方法を扱う。この方法は非常に芸術的／洗練されたもの（*magis curiosus*）であるが、高度な教育を受けた人々の前でのみ（*coram valde intelligentibus*）使うべきである。というのは、この方法は、その説教全体のなかで、冒頭の主題聖句でないかぎり一つの権威ある典拠も引かれないようなものである。［説教が］いくつかの部分に分割されることはないが、しかし実は十分な数の分割が含まれており、権威ある典拠も説教全体に散りばめられている。このタイプの説教は非常に芸術的／洗練されている（*valde curiosus*）。[59]

この種の説教で暗示的に引用されている聖書箇所を理解できるのは学識のある聴衆だけだった。この方法は「よく教育をうけた者たち（*valde intelligentes*）のあいだでラテン語において」―俗語ではなく―「たいへんふさわしい」とベイスヴォーンは第四九章でも述べている。[60]

ベイスヴォーンのなかに *curiositas* についての相反する考えがあったが、それがもっともよくあらわれるのは、彼が「語的一致」（*concordantia vocalis*）というもう一つのテクニックを議論したときである。まずこのテクニックについて最初に言及される第七章を引用したうえで説明しなければならない。

> 啓発よりもむしろ装飾と虚栄に（*ad curiositatem et vanitatem*）属する数多くの方法があるように私には思われる。たとえば、語的一致―すなわち、もし主題聖句が「来たれ、主イエス」（***Veni, Domine Jesu***）（黙示録二二章二〇節）である場合に［来た

れ（*veni*）という語からとられた」動形容詞「来るべき」（*veniendi*）や名詞「到着／（キリストの）降誕」（*adventus*）、あるいは［主よ（*Domine*）という語からとられた］動詞「支配すること」（*dominari*）、あるいはイエスと同義である名詞「救世主」（*salvator*）―を用いるというのはありえない。[61]

ここで示されているように、語的一致は、①主題聖句の語（*dictio thematis*）と、それを説教者が解釈した語（*propositio*）が、語のレベルで一致していること、②この関係にある語そのものを意味している。「語のレベルで」というのは、主題聖句の語とそれを説教者が解釈した語の両方で、語形変化や活用は許されるとしても、同じ語が用いられねばならないという意味である。たとえば、主題聖句から「来たれ」（*veni*）という語をとって、彼の解釈のなかに「到着／（キリストの）降誕」（*adventus*）という語を含ませるということである。この語的一致の反対語が「意味的一致」（*concordantia actualis*）であり、これは①主題聖句の語とそれを説教者が解釈した語のあいだに意味（論）的な連想関係があること、そして②そういう関係にある語そのものである。「意味的一致」は、同じ語をつかわなくてもよいという意味で「語的一致」よりも相当に自由である。[62] ここで引用した一節のなかで、ベイスヴォーンは *curiositas* と *vanitas* という言葉を語的一致の使用を批判するために否定的に用いている。彼がこのように考えるのは、後に第二二章において述べられるように、その説教が俗語でなされる場合に、俗人はこのテクニックがもちいられているかどうか気づかないからである。[63] 第二二章はさらに、語的一致は不必要であり、そのかわりに意味的一致を用いるべきだという。

しかし、先取りして述べれば、第二二章で重要なことは、すでに見たように *curiositas* のゆえに語的一致の使用を批判する一方で、その同じ *curiositas* を意味的一致の使用を促すために肯定的な意味で言及している点である。引用しよう。

> もし七つの語的一致が［主題聖句の］どの言明（の語）についてもその解釈のために見つかるのであれば、それは十分である。少なくともそれだけの数が必要なのである。しかし、目新しさ（*curiositati*）のために適したそれだけ多くの語的一致を見つけるのは困難である。それがあまり数多くないのであれ

ば、努力が傾けられねばならない。[64]

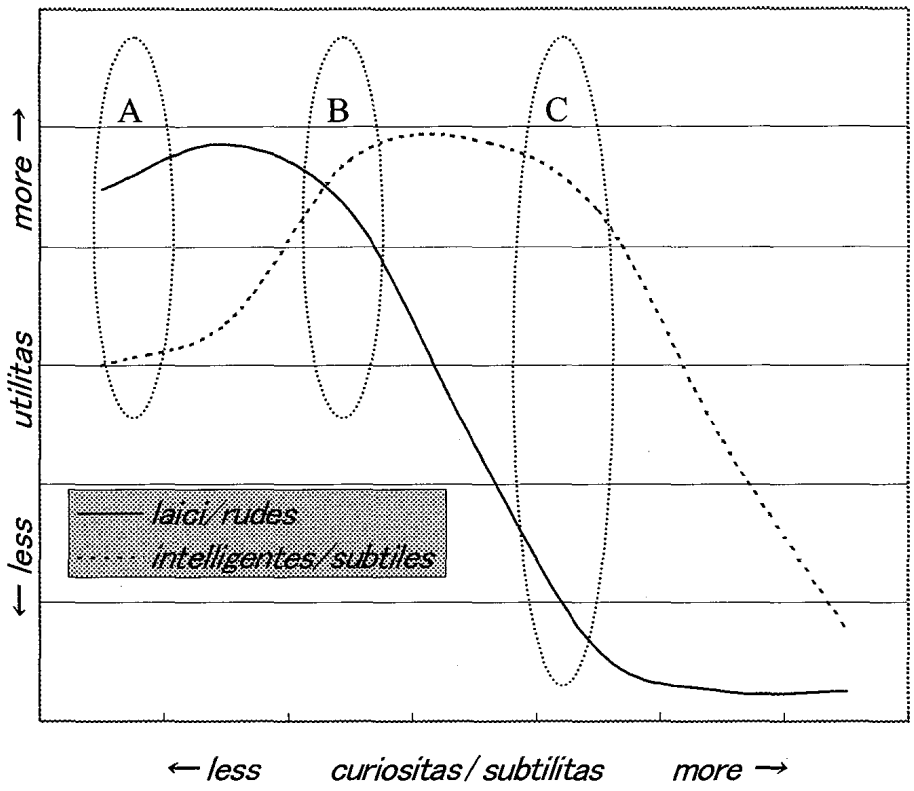
ベイスヴォーンがここで導こうとしている（しかしそれを自ら言い切ってはいない）結論は、意味的一致を使うことによって聖書解釈のために使える語の範囲が広くなり、より目新しい解釈が可能になるということである。ここに見られる *curiositas* に対するベイスヴォーンの一見矛盾する態度は程度問題として説明できる。すなわち、語的一致の使用に固執するのは適切な限度を超えた過度な *curiositas* であるが、意味的一致の使用（すなわち語的一致の条件の緩和）は適切なレベルの *curiositas* に繋がるということである。

五　*curiositas* と *utilitas* の関係

以上で観察したことから明らかになったのは、ベイスヴォーンは、*curiositas* と *subtilia* を、それらが聴衆の理解（*utilitas*）を妨げず説教者の自尊心・虚栄心にのみ仕えないかぎり、一般的には有益であると考えていたということである。*curiositas* であるテクニックはある程度までは、ある種の聴衆に対しては説教の *utilitas*（有用性／有効性）を高めるが、別の種類の聴衆に対してはそうではない。その聴衆の種類についてベイスヴォーンは二種類しか議論しない。すなわち、俗人（*laici/rudes*）と、教育を受けた／鋭敏な者たち（*intelligentes/subtiles*）である。説教テクニックのなかのあるものは洗練された聴衆にしか適しておらず、*exempla* といったあるものは俗人に特に適している。

こうした説教テクニックの *curiositas* と、その有用性あるいは有効性（*utilitas*）の関係は、次の概念グラフによってきれいに描くことができる。*curiositas/subtilitas* が横軸にとられる。右にいけばいくほど、その説教のなかで用いられたテクニックはより芸術的であり、より洗練されており、より複雑であり、より目新しいということになる。他方、*utilitas* は縦軸にとられている。上にいけばいくほど、その説教テクニックは所与の聴衆に対して有用／有効だということになる。その聴衆についてはグラフ上では俗人が点線の曲線であらわされ、教育を受けた者たちが実線の曲線であらわされている。

A（グラフのなかで波線の輪のなかにあるAの字によって指定されている）の部分では、用いられている説教テクニックは、教育をうけた者たちよりも俗人らに対してより効果的であることを示している。[65] 簡素であり *curi-*



ositas を欠くことは俗人がその説教を理解しやすくするだろうが、より教養のある聴衆にとっては十分には興味をかきたてるものではないだろう。とはいっても、多少の目新しさ—たとえば例話の使用—は俗人からの注意をより引きつけることになるだろう。次に、C（同様にグラフ上で指定されている）の部分では、完全に反対のことがおこるだろう。すなわち、複雑で精妙な説教テクニックが用いられるならば、[66] よく教育を受けた者たちのみがそれらを理解することになる一方で、俗人はまったくそれを理解できないということになる。もし、両方のタイプの聴衆がその場にいたのならば、有能な説教者であれば、俗人と教育を受けた者たちの両方が満足できる説教テクニックを使うことができるはずだろう（Bの部分）。説教者はこれらの事柄について意識していただろうし、それにしたがって説教のテクニックと題材を選んだのである。ベイスヴォーンが、聴衆の理解と忍耐を超えないかぎりにおいて、*curiositas* を肯定的な要素であると考えていたことが以上で明確に示された。

六　おわりに

中世においてすべての説教者がベイスヴォーンや彼の

同類たちと同様に、*curiositas* に対して肯定的な態度を示していたわけではない。*curiositas* のもっとも声高い批判者の一人は、ベイスヴォーンがよりにもよってその説教における *curiositates* の使用について賞賛したクレルヴォーのベルナルドゥスであった。スティーヴン・フェルオーロの研究によれば、ベルナルドゥスは「あまりにもしばしば学問を求める者たちが、知ることの欲望（好奇心）と、博識として人にしられたいという野心（虚栄心）と、学問が彼らに金銭と名誉をもたらすであろうという期待（聖職売買）によって動機づけられていると批判していた」[67]。ベルナルドゥスの批判は学問の動機へと向けられており、この文脈のなかで *curiositas* は、知識をそれ自体のために追い求める欲望を意味している。したがって、説教という文脈における芸術性、目新しさ、装飾、洗練を意味するベイスヴォーンの *curiositas* 概念は、ベルナルドゥスが批判する概念と正確に同じではない。にもかかわらず、この語には本質的に、過剰さ、あるいはあらかじめ想定されている限度を超えているという感覚が付随しており、それがベルナルドゥスの用法とベイスヴォーンの用法の両方にかかっている。これに加えて、ベルナルドゥスがいう虚栄心（*vanitas*）の概念はベイスヴォーンのそれと重なっている。というのは、両方とも、虚栄心を、博識である人物として人に知られたいという野心を表しているからである[68]。ベイスヴォーンが、たとえば語的一致を過剰であるとして批判するとき、彼はベルナルドゥスの批判と同種の保守的かつ道徳家的アプローチを説教についてとっている。ただ際だっているのは、ベイスヴォーンがしばしば *curiositas* と *vanitas* を許容し、さらに、*curiositas* の性質をもつテクニックの使用に対して反対する場合よりも、強く支持する場合のほうが多いということである。

ベイスヴォーンの *curiositas* に対する肯定的なアプローチの背景にあるのは、彼の世代のよく訓練された説教者たちの心性と当時の俗人聴衆たちの嗜好である。いかに説教にとって「ちょっとした独創性」（*'touches of originality'*）が重要であるかについてベリル・スモーリーは明らかにしている[69]。彼女のあげる例をいくつか引こう。ドミニコ会士サクソンのヨルダーヌスといった有名な説教師でさえ、自分がかつてした説教をくりかえしたと非難された。学識を積んだ説教者たち—多くの場合彼らは托鉢修道会士であった—は、剽窃したという誹謗中傷から自分たちをまもることに熱心であったという。ある神

学教師は、同僚の説教師に自分が書いた説教を貸さないように示唆している。それは、たまたま同じ聴衆に対して同じ説教が語られた場合を考えてのことである。その説教が同僚によってされたのをすでに聞いたことがある聴衆のなかの誰かが、その説教を書いた元の人のところにやってきて「あなたがさきほど説教なさった全文が私の帳面にあります。お見せしましょう」といってくるかもしれないから、というわけである。ここでいう独創性は説教におさめられた神学的教えそのものに求められているわけではなく、例示のために用いられる話（例話）や説教の方法において求められるものだった。[70] まさに、こうしたことが、先にみたベイスヴォーンの「智慧を通じてあまり生産的（*fecundi*）でない者は、雄弁（*facundi*）であるよう努めさせるがよい」という言葉の背後に存在していたのである。[71]

俗人の嗜好についてはヘレン・スペンサーが論じている。[72] 彼女が言及するのはよく知られたロンドンのあるフランシスコ会士である。「彼はそらで覚えた［モーゼの］十戒についての説教をあまりにもしばしば繰り返したため、陰で「修道士十戒屋ジョン」（*frere John x. Commaundementes*）として知られるようになった。彼の僕はなにか他の主題について説教するように懇願した。『というのは、あまりにもしばしば同じことを説教していたために、彼が話し始めるやいなやなにをいうか皆が知っていたからである』（*for euery man knoweth, quod he, what ye wyll say, as some as euer ye begyn, because ye haue preckyed it so ofte'*）」。[73]

目新しさを追い求めねばならないというプレッシャーを、ベイスヴォーン自身も証言している。先に言及した『説教形式』第七章のなかで、短い説教史叙述を記したあと彼は以下のように述べる。[74]

ここにおいて、他人が用いた主題聖句を使うのを拒んで新しいことを言おうと努め、他人がすでに上手に述べたことを上手に繰り返そうとしない人々が、いかに高慢であり混乱しているといわれても仕方ないかは明らかだろう。しかし、そうでなければならないとするなら、ある人の蔵書は、それらの本のなかでうまくいわれていたことが繰り返していわれないように、その人の死とともにすべて焼かれなければならないということになる。これがいかにばかげたことであるかは、まずは［洗礼者ヨハネがつかっ

た主題聖句を繰り返して用いた」キリストをみても明らかである。[75]

ベイスヴォーンはここで目新しさをもとめて行き過ぎていると彼が考える説教者たちを叱責している。ただ、上で見たように、彼は基本的には *curiositas* を促している。それは説教において必要なものであり、適当な量をもちいれば説教の有用性（*utilitas*）を高めるものなのである。

一四世紀末のイングランドにおいて、ウィクリフおよび彼の教えの信奉するロラードと呼ばれた者たち、さらに異端とされた彼らとは立場を異にする正統保守派の人々は、ベイスヴォーンのような学者説教者を批判の的にした。後に、一五世紀の終わりと一六世紀の始めまでに、エラスムスと宗教改革者たちは、新説教形式で訓練された托鉢修道会士の説教を嘲笑した。[76] イングランドにおける説教史研究の先駆者であるG・R・アウストは、一四〇〇年頃に古い訓話（homily）を真似る、すなわち旧説教形式の説教が、ロラードのあいだだけではなく正統派のなかでも復興したと主張した。[77] しかし、この主張にはスペンサーが相当の留保をつけくわえている。スペンサーは、「旧説教形式に対する興味は（数少ない著述家を例外として）福音を宣べつたえるという使命にとって「本質的ではなく」偶発的であった」と説得的に論じている。[78] 一三世紀から一五世紀にかけて新説教形式で執筆された説教はあまりにもひろく行きわたっていたため、「有用でどこでも手に入る説教執筆の手法を、単にそれが濫用されうるから、そして濫用されたからといって、拒絶するのはばかげたことだったろう。説教術書（*artes*）は抑制を求めているのである」。[79]

エラスムスや宗教改革者たちの目を通して見るならば、*curiositas* にこだわった中世後期の説教者たちは、彼らの聴衆たちに対する説教の有用性（*utilitas*）をまったく軽視していたということになる。これにはいくぶんの真実が含まれているとはいえ、この印象は本質的には誤解をまねくものである。というのは、聴衆とその聴衆の説教に対する反応を中世の説教者が考えるにあたって、*curiositas* は *utilitas* と必ずしも矛盾するものではなく、場合によっては *utilitas* を増進するものだったからである。中世後期における説教を宗教改革の単なる背景としてではなく印刷術以前の時代におけるマス・メディアとしてみるとき、中世の説教者が *curiositas* に払った注意

と配慮を真剣にとる必要がある。*curiositas* な特質をもつ個々の説教テクニックとそれらが聴衆によってどのように受容されたかについてのさらなる研究は、中世におけるコミュニケーションあり方と修辞学の実践の理解に役立つだろう。こうした研究はより広い文脈のなかで考えれば中世後期の人々の思考法（mindset）についての洞察をもたらすであろう。(80)

本論文は基本的に以下の論文の日本語版である。The Importance of *Curiositas* in Late Medieval Preaching', in *Minds of the Past : Representations of Mentality in Literacy and Historical Documents of Japan and Europe*, ed. by Takami Matsuda, Kenji Yoshitake, Masato Izumi and Michio Sato (Tokyo : Centre for Integrated Research on the Mind, Keio University, 2005), pp. 51–74.（松田隆美・吉武憲司・和泉雅人・佐藤道生編著『こころのかたち―東西文献資料に見られる心性の表象』所収（東京：慶応義塾大学21世紀ＣＯＥ心の統合的研究センター　二〇〇五年）五一―七四頁）

註

（1）H. Leith Spencer, *English Preaching in the Late Middle Ages* (Oxford : Clarendon Press, 1993), p. 236 : 'an expository method of preaching which permits the practitioner to expatiate upon an entire passage of scripture'.

（2）下記註(17)も参照。Spencer, *English Preaching*, pp. 232–33 は、「分割」、すなわち説教をいくつかの部分に分割するテクニックは、旧説教形式においても用いられていることを説得的に論じている。これは、分割は旧説教形式とは相容れないものであり新説教形式の特徴であるとの一部の見方に反駁するものである。

（3）M. Michele Mulchahey, *First the Bow is Bent in Study : Dominican Education before 1350*, Pontifical Institute of Mediaeval Studies (hereafter PIMS), Studies and Texts, 132 (Toronto : PIMS, 1998), p. 402 : [the] 'careful elaboration of a single selected *thema*, an individual line from Scripture'. ここで留意するべきことは、主題聖句（*thema*）という言葉をもっぱら新説教形式に結びつけて考えるべきではないということである。この語は（新説教形式の主題聖句が聖書からの一行であるのに対して）その日に読まれることが定められた聖書箇所全体を意味することがしばしばあり、その場合この語は旧説教形式とも適合していたのである(Spencer, *English Preaching*, p. 232)。以下（特に第四章において）主題聖句をなす言葉（言明）（*dictiones*）は太字で示す。

（4）説教術書一般については Marianne G. Briscoe, '*Artes*

praedicandi', in *Artes praedicandi and Artes orandi,* ed. by Marianne G. Briscoe and Barbara H. Jaye, Typologie des sources du moyen âge occidental, 61 (Turnhout : Brepols, 1992), pp. 9–76 を参照。

(5) D. L. d'Avray, *The Preaching of the Friars : Sermons Diffused from Paris before 1300* (Oxford : Clarendon Press, 1985) ; idem, *Medieval Marriage Sermons : Mass Communication in a Culture without Print* (Oxford : Oxford University Press, 2001). 説教執筆支援ジャンルについての邦語でのすぐれた概観として大黒俊二「「声の影」—西欧中世の説教史料—」『人文研究〈大阪市立大学大学院文学研究科〉』第五四巻第二号、二〇〇三年、五五—八六頁。托鉢修道会修道院付属図書館を通じた説教支援ジャンルの普及については赤江雄一「一四世紀イングランドにおける説教者の図書館—ヨークの一托鉢修道院の事例から—」『西洋史学』第二一〇号、二〇〇三年、一一二三頁を参照。

(6) *'Forma praedicandi',* ed. by Th.-M. Charland in *Artes praedicandi : Contribution a l'histoire de la rhetorique au moyen âge*, Publications de l'Institut d'Études Médiévales d'Ottawa, 7 (Paris : Vrin, 1936), pp. 231 : 323. 以下この校訂版を *FP* と略記する。なお英訳として、'Robert of Basevorn : The Form of Preaching (1322 A.D.)', trans. by Leopold Krul, in *Three Medieval Rhetorical Arts,* ed. by James J. Murphy (Berkeley : University of California Press, 1971), pp. 109–215 があるが、しばしば正確な理解に基づかない訳であるため使用には注意が必要である。

(7) See *Ars componendi sermones of Ranulph Higden*, O. S. B, ed. by Margaret Jennings, Davis Medieval Texts and Studies, 6 (Leiden : Brill, 1991).

(8) 'Quia, cum taediis essem diversis affectus, *cum a diversis diversorum Ordinum religiosis simul et saecularibus super hoc precibus essem magnis frequentibusque pulsatus*, considerans quoque quod aliis ut olim occupationibus non urgebar, et sperans [...] ut magnitudinem taediorum migitet applicatio mentis ad alia' : *FP*, ch. 1, p. 233. 強調部は筆者。

(9) Yuichi Akae, 'A Study of the Sermon Collection of John Waldeby, Austin Friar of York in the Fourteenth Century' (unpublished doctoral thesis, University of Leeds, 2004), pp. 97–216 (Chapter 4). この成果については「中世ヨーロッパにおける説教執筆の理論と実践」と題して史学会大会（二〇〇五年一一月一三日）で報告し、現在日本語英語両方で出版準備中である。

(10) Siegfried Wenzel, *Preachers, Poets, and the Early English Lyric* (Princeton, NJ : Princeton University Press, 1986), p. 66 も参照。「芸術的」(artistic) という言葉は一九世紀中葉から使われだした言葉だが、ここでは自立した領域としての「芸術／美術」(fine arts) の観念を前提とせずに使用する。

(11) たとえばd'Avray, *The Preaching of the Friars,* pp. 246–47; Spencer, *English Preaching,* p. 245; Wenzel, *Preachers,*

Poets, and the Early English Lyric, p. 66を参照。

(12) 'Visis praeambulis, jam accedendum est propius ad propositum, ad ostendendum formam praedicationibus requisitam' : *FP*, ch. 6, p. 243.

(13) 'Pro quo sciendum quod diversi diversum modum a principio habuerunt, et etiam adhuc habent, ut fere quot sunt praedicatores valentes, tot sunt modi distincti praedicandi. Ideo impossibile esset de illis omnibus artem tradere, nec hoc est propositum, sed de aliquo modo magis famoso secundum moderna tempora' : *FP,* ch. 6, p. 243.

(14) 'Et tandem Ipse [i.e. Deus], corpus humanum et animam in unitate suppositi assumens, veniens praedicavit etiam idem thema quod praeco suus prius praedicaverat, ut habetur Matth. 4' : *FP,* ch. 6, pp. 243-44. なお、ヨハネの説教についてはマタイの福音書三章二節、キリストの説教についてはマタイの福音書四章一七節で言及されている。

(15) 洗礼者ヨハネの説教をキリストが模した点についてはもう一度立ち返る（下記註(74)および註(75)）。なお『説教形式』第八章の以下の箇所も参照。Consimilem modum praeco suus [i.e. Christi] Baptista tenuit, ut patere potest inspicienti Evangelium' : FP, ch. 8, p. 246.

(16) 'Et iterum post Christum, surrexerunt Apostoli et discipuli, inter quos beatus Paulus primatum tenet, et postea diversi confessores et doctores, inter quos mihi videntur insuper Augustinus, Gregorius and Bernardus singulares, quorum sermones solemniores et homiliae usque hodie frequentantur. Unde, ut mihi videtur, quod si aliquis niteretur *imitari* aliquem modorum quem aliquis istorum quinque praedictorum qui sunt Christus, Paulus, Augustinus, Gregorius et Bernardus tenuit, hoc esset magis laudabile' : *FP,* ch. 6, p. 244.

(17) アウグスティヌスの説教の方法についてベイスヴォーンが『説教形式』第一〇章で説明していることは、上述（注11）したことと正確に対応している。'et cuius [i.e. Augustini] mos est aliquando totum unum evangelium exponere, vel aliquem magnum processum Scripturae, et illum exquisite explanare, ut patet *De verbis Domini et Apostoli...*'（「そして、一つの福音書全体あるいは聖書のある箇所を物語り、それを卓越したかたちで説明するのは、*De verbis Domini et Apostoli* でみられるように、時に彼［アウグスティヌス］の習慣だった」）: *FP,* ch. 10, p. 246. 第一二章の最後部分も参照。Sunt etiam alii doctores, ut Chrysostomus, Fulgentius, Leo, et alii, quorum modos ideo non specifico, quia distincti a praedictis mihi non videntur'（「他にもクリソストム、フルゲンティウス、レオその他といった博士たちがいるが、彼らの方法について私は特定して扱わない。というのは、それらは、すでに私が［キリストと他の四人の説教の方法について］述べたものと異なっているようには私には思えないからである」）: *FP,* ch. 12, p. 248.

(18) キリストについては第八章で、聖パウロについては第九章で、アウグスティヌスについては第一〇章で、グレゴリウス一世については第一一章で、クレルヴォーのベルナルドゥスについては第一二章で論じられている。

(19) この一節には直ちに下記註(61)で引用する節が続いている。

(20) 個々の説教テクニックの説明は、本稿での主な関心ではなく、別のところであつかっており（上記註(9)参照）、さらに紙幅も限られていることから、本稿では最低限にとどめる。

(21) それらは例えば James J. Murphy, *Rhetoric in the Middle Ages : A History of Rhetorical Theory from Saint Augustine to the Renaissance* (Berkeley : University of California Press, 1974), pp. 347-48 で列挙されている。

(22) 上記註(16)を参照。

(23) Spencer, *English Preaching,* p. 241.

(24) 'Leve non est intelligere omnes modos quibus Christus praedicavit, qui omnes, ut credo, modo[s]laudabiles praedicandi in modo suo inclusit, utpote fons et origo boni, qui modo per promissa, modo per comminationes, modo per exempla, modo per rationes, modo leviter ad intelligendum, modo lucide, modo profunde et obscure praedicavit' : *FP,* ch. 8, p. 245

(25) *FP,* ch. 8, p. 246.

(26) 'Luculenter autem Paulus potissime ratione simul et auctoritate usus est, nunc ex auctoritate rationem contexens, nunc rationem per auctoritatem confirmans[...]Et hi modi modo singulariter commendantur, praecipue quando exemplum vel rationem confirmat per auctoritatem', *FP,* ch. 9, p. 246.

(27) '*et cuius mos aliquando[...]* aliquando unum thema accpere et illud diffuse prosqui, sicut in sermone de beato Paulo : Benjamin lupus (Genesis 40 : 27), etc. Semper tamen, quantum potest rationibus insisti. Unde dicit quod ubi deficit aucitoritas, rationi insistendum est, sine qua nec auctoritas est auctoritas.[#...#]Secundus modus[二番目の 'aliquando'を指しつつ]est modo magis usitatus, qua curiosior' : *FP,* ch. 10, pp. 246-47（二つの＊で挟まれた引用冒頭の部分は上記註(17)で、[#...#]で中略された部分は下記註(32)でそれぞれ引用されている）。

(28) フィグラは①新約聖書における―あるいはその後におきた―事柄や出来事の「原型」が旧約聖書においてすでに予示または象徴されているとする予型論における、その「原型」が原義であると考えられるが、これと重なりながら②（旧訳聖書にかぎらない）聖書の物語、さらに③そのようなものとして例話として機能しているもの（*exemplum in figura*）でもありうる。詳細な議論は Akae, 'A Study of the Sermon Collection of John Waldeby', pp. 156-62 を参照。

(29) 'Laudabilem modum Gregorius habet, maxime per figuras Scripturae Veteris Testamenti et per exempla sensibilia et per obsecrationes' : *FP,* ch. 11, p. 247.

(30) *FP*, ch. 8, p. 246.

(31) 上記註(17)参照。

(32) 'Primus modus esset bonus eis qui sunt labilis memoriae vel debilis, quia facilius potest occurrere homini processus aliqujus magni evangelii quam subtilis argumenti, vel parva divisio unius membri' : *FP*, ch. 10, pp. 246-47（上記註(27)を参照）。

(33) この節にあらわれる subtilis argumenti というフレーズは上述したキリストの説教の方法に対する批判の一つ（*subtilitas nulla necessaria*）を思いおこさせる。

(34) 'Modo, de Bernardo. Sciendum quod modus ejus est sine modo, modum excedens et capacitatem fere omnium ingeniorum, qui prae omnibus in omnibus dictis Scripturam inculcat, ut vix sit una sua sententia quae ex auctoritate Bibliae vel multis auctoritatibus non dependeat. Hic semper devote, semper artificialiter procedit. Aliquod thema certum, vel aliquid loco thematis, i. materiam aliquam quam intendit tractare, accipit, quod artificialiter introducit, dividit nunc in duo membra, nunc in tria, nunc in plura, confirmat, concludit, omni utens colore rhetorico, ut totum opus utraque redolentia refulgeat, saecularis scilicet et divina, quae, ut mihi videtur, magis motive intelligentes ad devotionem invitat et in curiositatibus novis de quibus nunc est sermo magis ministrat' : *FP*, ch. 12, p. 247. 上述したように「分割」の使用は、新説教形式における標準的手続きであるが、旧説教形式とも適合的である。上記註(2)を参照。

(35) しかし、ベルナルドゥスのいくつかの方法は、十分には芸術的／洗練されている（*curiose*）わけではない。『説教形式』第二〇章においてベイスヴォーンは「しかし、説教者は主題聖句を一二かそれよりも少ない部分にただちに分割し、それぞれについて何かを述べてもよい。例えば、『一日には一二時間あるではないか』（ヨハネ書一一章九節）という、使徒について論じるための主題聖句があるとしよう。この場合、ただちに以下のように続けてよいだろう。『一日の最初の時間は聖ペテロと呼んでよいでしょう』。そして残りについても同様に。聖ベルナルドゥスはこの方法を頻繁に用いたけれども、この方法はこれから論じる芸術的／洗練された方法からはほど遠い（*alienus est ab illo curioso*）」。'Potest tamen aliquis statim dividere in duodecim vel infra, et de quolibet aliquod exsequi, ita quod non plures divisiones faciat. V.g. posito quod de Apostolis esset thema : Duodecim sunt horae diei (John 11 : 9), statim esset sic prosequendum : "Prima hora diei bene poterit beatus Petrus dici", et sic de aliis. Et hunc modum habet frequenter beatus Bernardus. Sed iste modus alienus est ab illo curioso de quo nunc est sermo' : *FP*, ch. 20, p. 255.

(36) ここではベイスヴォーンは、ベルナルドゥスの説教の方法を賞賛した第一二章の内容を示唆している。

(37) 中略された部分は教皇レオとキケロからの引用部分である。

(38) ルカーヌス『内乱記』(Lucan, *Pharsalia*), VII. 67 : 'addidit inualidae robur facundia causae'.

(39) The *Topographica Hibernica*, ed. by James F. Dimock, *Giraldi Cambrensis Opera,* V, Rerum Britannicarum Medii Aevi Scriptores (London : Longmans, Green Reader and Dyer, 1867), p. 6.なお『アイルランド地誌』は有光秀行氏の訳業により青土社から一九九六年に刊行されている。これによれば一六頁。

(40) Augustine, *De doctrina christiana,* lib. IV, c. 12. (Patrologia latina, 34, col. 101).

(41) 'Omnino ideo mihi reprehensibile videtur quod quidam dicunt quod praedicatio non debet splendere falsis verborum purpuramentis colorum, cum in pluribus sermonibus Bernardi et fere semper totum sit coloraturum. [...] Quis enim haesitet quod utrumque simul, sapientia scilicet et eloquentia, plus movent quam alterum per se. Sic tamen insistendum est eloquentia, ne recedatur a sapientia, quae melior est. Quod si utrumque haberi non potest, immo nec sapientia. Constat quod melius est eloquentiam habere quam simpliciter omni bono carere. Quid enim valeret sententia in qua nec esset sapientia nec eloquentia? Qui igitur sapientia fecundi esse non possunt nitantur esse facundi. *Et ferat invalide robur facundia causae*, sicut poeta ait, *ut in quo parum potuit ratio,* plurimum posse videatur oratio, ut dicit Giraldus Cambrensis in prologo libri *De mirabilibus Hiberniae.* Nec ex hoc sequitur quod legimam causam praestent auditoribus eos judicandi de appetitu favoris humani. Tamen, ut dictum est, ex causa bona et meritoria possunt studere eloquentiae. Sine dubio tamen reprehensibile est valde quod quis magis studeat eloquentiae, si sapientiam per studium possit habere, sicut docet Augustinus, IV *De doctrina christiana,* ubi vult quod praedicator debet niti ut doceat, ut delectet et ut flectat. De illis tamen qui tantum delectare intendunt ut nec doceant nec flectant, dicit quod eorum eloquentia tanto est damnabilior quanto purior. Utrumque igitur simul melius, qui dulcis mixtura bonorum : *FP,* ch. 13, pp. 248-249. 以上は教皇レオとキケロの引用を中略したのを除いてこの章の全体である。強調部分は筆写。

(42) この語句合わせはギラルドゥス・カンブレンシス (Giraldus Cambrensis) の『アイルランド地誌』(*De topographia Hiberniae*) の序文の一文に基づいている。'ut in quo non praevalent esse fecundi, fieri valeant vel facundi ...'(The *Topographica Hibernica,* p. 6).実は、キケロやルカーヌスの引用を（さらにここでは中略した教皇レオとキケロの引用を）含めたこの章の大部分がこの序文の同じ段落からとられている。

(43) 'Est hic incidens huic proposito quaerere utrum possit esse sermo de unica dictione. Videtur mihi quod sic, scilicet quod de una dictione explicita, quae tamen aliam vel alias implicat, potest esse sermo, ut videlicet de verbo exhortative sumpto, sic dicendo : ***Intelligite, Praedica*** vel

Praedicate, Ite, Ambulate, et hiis similibus. Sed iste modus est quasi omnino ignotus. Et ideo placet hic, quam breviter possum, exemplar talis sermonis interferre' : *FP,* ch. 21, p. 256.

(44) As for the *antethema/prothema* see Akae, 'A Study of the Sermon Collection of John Waldeby', pp. 116–17. はしばしば説教のなかに含まれた小さな説教であるように見える。

(45) 'Patet jam in isto antethemate sufficiens subtilitas, primo quod introducitur cum auctoritate originali, cui concordat auctoritas Scripturae ; secundo quod illa auctoritas Scripturae secundum illud originale dividitur, et quaelibet particula sic confirmatur ut dictionem de quo est sermo vocaliter accipiat ; tertio quod tertia, auctoritas simul se et duas auctoritates praecedentes includat ; quarto quod in ordine, pro gratia petenda, inculcantur primae auctoritatis particulae, v.g. contra illud quod dicitur Aperuit illis sensum (Luke 24 : 45), ponitur Aperiat nobis ostium sermonis sui (Colossians 4 : 3), et sic de aliis' : *FP,* ch. 21, p. 257.

(46) Cf. 'Quomodo autem potest fieri de eodem prosecutio, postea patebit, quia nunc tantum de antethemate est sermo'（後に、同じ［主題聖句］についてどのようにしてさらに展開していけるか論じられる。というのは、今は「副主題」についてしか話さないからである）: *FP,* ch. 21, p. 273.

(47) 'Kalendarium igitur promissionis supra, capitulo 21 o, praelibatae prosequens, magis curiosum modum introductionis talis thematis reputo si per auctoritatem promo introducatur, sic quod ex auctoritate statim tria membra elici possunt quae festo conveniant et themati' : *FP,* ch. 32, p. 272.

(48) これは上で引用した第二一章で例として挙げられたのと同じ主題聖句である。この箇所は第二テモテ二章七節であろう。

(49) 'Sic in tribus efficaciter implevit quod in uno est simpliciter imperatum : ***Intellige***. *Sic patet modus magis curiosus. Tamen alii modi possunt hic ministrare, licet non ita curiose' : FP,* ch. 32, p. 273.

(50) 'Audivi etiam valentem virum in sermone ad synodum accipere pro themate hoc totum : Rogate dominum messis ut mittat operarios in vineam suam. Ite (Luke 10 : 2–3 ; cf. Matthew 9 : 38). Iste qui fuit magister solemnis in theologia et praelatus magnus, et tam in questionibus quam in sermonibus expertus, tamen ab omnibus intelligentibus communiter fuit thema reprobatum, praecipue pro additione illius dictione *Ite*, de qua dictione per se posset esse sermo satis curiosus et utilis' : *FP,* ch. 20, pp. 255–56.

(51) フィギュラについては上記註(28)を参照。

(52) 上記註(29)を参照。

(53) 'Quarum primus est magis utilis et efficax, et intelligibilis in quocumque vulgari idiomate apud rudes' : *FP,* ch.

49, p. 314.

(54) 'Tertius modus ratiocinari per exempla, quod multum valet laicis, qui gaudent exemplis' : *FP,* ch. 39, p. 293.

(55) 'Parisienses statim adderent figuram, quod est maximae curiositatis in loco isto, vel saltem testimonium Scripturae, quod apud eos non tanti reputatur' : *FP,* ch. 31, p. 272. ベイズヴォーンは以下のように続ける。'Unde sic dicerent : 'Quidquid est in mundo est prosperum vel adversum. In cujus figura Deus totum tempus in diem et noctem divisit, in diem prosperitatis et noctem adversitatis', vel aliquid simile. Quod si illa applicatio alicujus sancti esset, magis curiosum esset, ut si sic diceretur : 'Sicut exponit talis sanctus in tali loco'. Et ita sunt aliae particular confirmandae'(「したがって、彼らはこういうであろう。『この世にあるものはなんであれ、都合のよいことが悪いことです。このことのアイグラとして、神はすべての時間を、昼と夜、優遇の昼と冷遇の夜に分けられたのです（創世記一章一四節）』。あるいは、似たようなことを。しかし、もしある聖人について当てはめねばならないなら、『これこれの聖人が、これこれの場所で解き明かされたように』というのは非常に芸術的＼洗練されている(*magis curiosum*)。このようにして、他の部分も確認される」: *FP*, ch. 31, p. 272. パンクチュエーションには校訂からわずかに変更を加えている。

(56) 'Tamen his sciendum quod ita potest adduci historia alia sicut historia Bibliae, ut puta aliqua narratio Augustini vel Gregorii, vel alicujus auctoris, vel Helinandi vel Valerii vel Senecae vel Macrobii ; et hoc modo magis acceptatur narratio Augustini, dummodo sit nova et inusitata, quam Bibliae, et magis Helinandi vel alicujus alterius qui raro habetur, quam Augustini vel Ambrosii. Cujus ratio non est alia nisi vana curiositas hominum' : *FP,* p. 316.

(57) このテクニックについて限られた紙幅のなかで説明することは難しく詳細には立ち入らない。詳しくは Akae, 'A Study of the Sermon Collection of John Waldeby', pp. 176-82 (esp. p. 182) を参照。

(58) 'Utrum autem isto ornamento utile fuerit uti, dubium est nonnullis. Hoc scio, quod est magis curiosum quam utile. Ego communiter illo non utor, etiamsi se offert, quia quasi inexplicabile labyrinthum faciens, ingenia auditorum, nisi fuerint valde subtiles, obtundit' : *FP,* ch. 44, p. 302. It should be noted that the term subtilis is used not only about the preaching techniques but also about the audience.

(59) 'Nunc dicendum est de secundo modo praetacto, qui magis curiosus reputatur, sed nonnisi coram valde intelligentibus proponendus. Est enim modus iste ut toto sermone non allegetur una auctoritas nisi tantum thema in principio nec aliqua divisio est exprimenda, et tamen multae divisiones et sufficientes virtualiter includuntur et auctoritatibus fere per totum sermo respergitur. Iste sermo valde curiosus est' : *FP,* ch. 50, p. 316. この方法を用いた

例を一つ示したあと、ベイスヴォーンは以下のように続ける。'Patet intelligenti tantam subtilitatem esse quidquid in isto sermone continetur, et tamen ita occulte quod vix perpendi potest, ut pars artis maxima videatur artem velare, tanquam si lateat prosit'(「この説教に含まれているものが非常に精妙であり隠されているので、隠されたままであるほうが有益であるかのように技が技をおおよそ隠しているように思える。これはよく教育をうけた人々にとっては明らかである」) : *FP,* ch 50, p. 319.

(60) 'Secundus valde acceptabilis est in latino apud valde intelligentes' : *FP,* ch. 49, p. 314.

(61) 'et multa quae (i.e. moda) magis, ut mihi videtur, ad curiositatem et vanitatem pertinent quam ad aedificationem, ut quod concordantiae sint vocales. V. g. si thema sit : ***Veni, Domine Jesu***, nihil potest ministrare gerundivum veniendi vel nomen *adventus*, nec verbum *dominari,* vel hoc nomen *salvator,* quod est aequipollens ei quod est ***Jesus***' : *FP,* ch. 7, p. 244. この一節は、上記注一九で引いた部分の直後にきている。このベイスヴォーンの批判は語的一致という特定のテクニックに向けられたものであって、新説教形式全体に向けられたものではないことは強調しておく必要がある。

(62) 「語的一致」と「意味的一致」については私の博士論文のなかで詳細に扱っている (Akae, 'A Study of the Sermon Collection of John Waldeby', pp. 195-214 (here esp. pp. 195-96). また、'The Mindset of Fourteenth-Century Preachers : Composing Latin Sermons and Preaching in the Vernacular' と題して The 39 th International Congress on Medieval Studies, 6-9 May, 2004, Western Michigan University (Kalamazoo, Michigan USA) にて発表した。

(63) *FP,* ch. 22, pp. 257-58. 前註を参照。

(64) 'Si possint inveniri de qualibet dictione septem concordantiae vocales ad propositum, sufficiunt, et tot requiruntur ad minus. Sed difficile est tot invenire convenientes curiositati circa quam laboratur, nisi sint valde multae' : *FP,* ch. 22, p. 258.

(65) 第三章にて論じた旧説教形式における *curiositas* と *modus movendi* の欠如についての議論を参照。

(66) 中世後期における新説教でかかれた範例説教の大部分はラテン語で書かれている。しかし俗人に語りかけるためには、説教者は俗語を用いなければならなかっただろう。でなければ理解されることはなかったからである。実際に、筆録説教 (*reportationes*) とよばれる、書記が説教を聞きながら書き留め、それをあとで書き直し清書した史料は、形式と内容の両方において実際の説教をある程度よく反映していることを示している (Louis Jacques Bataillon, 'Approaches to the Study of Medieval Sermons', *Leeds Studies in English,* new series, 11 (1980), 19-35 (pp. 21-22) ; Nicole Beriou, *L'avènement des maîtres de la Parole : La prédication à Paris au XIIIe siècle,* 2 vols, Collection des Études Augustiniennes : Série Moyen Âge

et Temps Modernes, 32, 33 (Paris : Institut d'Études Augustiniennes, 1998), I, 108 ; d'Avray, *The Preaching of the Friars*, pp. 90-104)。もちろん、ラテン語で書かれた説教は、聴衆が十分に高度な教育をうけた人々（＝*literati*）であれば、そのままラテン語で語られても理解されたであろう。その場合、俗人聴衆は全く理解できなかっただろうが。筆録説教については大黒俊二「説教の『声』と『聞き手』」『歴史学研究』一五世紀トスカーナの俗人筆録説教』第七二九号、一九九九年一〇月および同「文字のかなたに—一五世紀フィレンツェの俗人筆録説教—」前川和也編著『コミュニケーションの社会史』所収、ミネルヴァ書房、二〇〇一年、一三九—一六八頁を参照。

(67) Stephen C. Ferruolo, *The Origins of the University : The Schools of Paris and Their Critics, 1100-1215* (Stanford, CA : Stanford University Press, 1985), p. 231. ベルナルドゥスの雅歌註解におさめられた説教36のフェルオーロの議論も同様に参照（pp. 65-66).

(68) 上述のベイスヴォーンの語的一致に対する批判を参照。

(69) Beryl Smalley, *English Friars and Antiquity in the Early Fourteenth Century* (Oxford : Blackwell, 1960), p. 37.

(70) Smalley, *English Friars and Antiquity*, pp. 36-40. スモーリーの本研究は、一四世紀イングランドの托鉢修道士のある特定のグループが、古典古代の異教（ギリシャ神話）の学識を利用してつくった例話（*exempla*）—中世の説教における新奇で少し変わった要素—の研究である。

(71) 上記注四二で言及したように、この文はギラルドゥス・カンブレンシスのテクストに基づいているのだが、それに、ベイスヴォーンが彼自身の文脈における意味を吹き込んでいると考えることは不合理ではない。

(72) *English Preaching*, pp. 91-108.

(73) *English Preaching*, p. 94, citing from *Shakespeare Jest-Books, I. A Hundred Mery Talys, II. Mery Tales and Quicke Answeres*, ed. by W. C. Hazlitt (London : Sotheran, 1881), *A.C. Mery Talys*, 83.

(74) 上記註(15)の付けられた本文を参照。

(75) 'In quo patet quam superbi et confusione digni sunt qui praeassumpta themata ab aliis respuunt, et ut nova dicant et ab aliis bene dicta ne iterum bene dicant student. Quod si faciendum esset, essent omnes libri alicujus comburendi in morte, ne iterum ibi bene dicta dicerentur, quod quam absurdum est patet, primo cum Christo' : *FP*, ch. 6, p. 244.

(76) Erasmus, Desiderius, *Ecclesiastae, sive de ratione concionandi libri quatuor*, ed. by J. Chomarat, *Opera omnia, Desiderii Ersami Roterodami*, V-4, V-5 (Amsterdam: North-Holland, 1991, 1994).

(77) G. R. Owst, *Preaching in Medieval England : An Introduction to Sermon Manuscripts of the Period c. 1350-1450* (Cambridge : Cambridge University Press, 1926), p. 139.

(78) Spencer, English Preaching, p. 268 : 'The chief novelty

perhaps lay in the recording of such material in English in prose Sunday collections from the late fourteenth century onwards, after a gap of nearly two hundred years'. To this extent, there may have been a revival of interest in the old ways ; cf. p. 230.

(79) Spencer, *English Preaching,* p. 267.

(80) アメリカ・カラマズーで発表した研究報告（上記註(62)を参照）のなかで最初の試みを行った。Cf. Akae, 'A Study of the Sermon Collection of John Waldeby', pp. 217-251 (Chapter 5).